

出藍文庫

2-1

羽衣小町の京散歩

近藤貴弥 著

羽衣小町 京散歩

一 雪見

普段は人で賑わう京都駅は、もう終電間近のようにひっそりとしていた。新幹線から降りた人々は、寒さから逃げるように襟やマフラーの中へ顔を埋めている。塩見周子は夜風から身を守るように、彼等の中に混じっていた。新幹線の中で買った珈琲はもう冷たい。

今更になって、手袋も帽子も持ってこなかったことを後悔していた。東京での移動は主にプロデューサーの運転する車だった。京都に来たら目的地までタクシーを使えばいいだろうと思っていた。が、乗り場に至るまでが冷える。本当ならばマフラーも忘れていたところだったのだが、プロデューサーから奪うように借りた。どうせ車の中だから寒くないでしょ、と。

ファッション誌の撮影の時に借りた小物の一つや二つを買い取れば良かった、と思う。あの時返したのは、確か、色合いが落ちていて周子には合わないような気がしたからだった。あれを普段周子が身に付けるには、少し大人っぽい。プロデューサーからは、似合っていたし良いじゃないか、と言われたが、同じプロダクションに大人がいると、比べてしまう。あのプロデューサーは、大体何に対しても、良いじゃないか、と言う。今回のこともそうだ。良いじゃないか、行ってきて、と言われた。別に引き留めてほしいわけではないが、実家との関係——アイドルとして花開き、関係は修復できたのだから良いのだが——のこともあり、そう簡単に京都に帰らされると、何故だか分からないが反発したい気持ちが生じてくる。せめてもの反抗として、マフラーを奪った。

プロデューサーのことを考えると、何だか不思議な苛立ちに襲われる。仕事ができないというわけではない。数多くのアイドルを担当し、上手くしていると思う。アイドル同士の関係にも気を遣っていると思う。ならば何故、こういう気持ちになるのかというと、何だか放任されているような錯覚を覚える。これは事実、錯覚だった。周子のスケジュールや仕事を

管理しているのはプロデューサーの大事な仕事のひとつだ。仕事の悩みや不安がありそうな時は、助言を送ってくれる。仕事をする人、としてプロデューサーはよくやってくれていると思う。そう、仕事をしてきている相手としては。

周子がオフの時、プロデューサーは仕事をしている。周子が仕事の時、プロデューサーは仕事をしている。プロデューサーは、仕事をしている。

いけない。思わず力が入り、ゴミ箱に珈琲の入ったカップを投げ捨てる。

オフの時は休むべきだと思うし、羽根を伸ばすべきだと思う。周子が京都へ帰るように

そんなことを考えていると、人気の少ない駅ビルにブーツの足音が高く響く。あまりの響きに、周子自身も驚いた。そうして、目を丸くさせる少女と目が合った。周子は得意の営業スマイルを浮かべ、軽く手を振る。新幹線の中で連絡を取り合ったのにも拘わらず、周子の姿を見て、小早川紗枝は呆れたように呟く。紗枝は珍しく、カジュアルな洋装に身を包んでいた。ニット帽に手袋、ぐるぐるに巻かれたマフラー。普段の紗枝からは想像できない姿に、

周子はスマートフォンを構えようとした。

「ほんまに来はった」

「写真撮っていい？」

「写真は事務所から駄目言われてるんどす」

アイドルらしい発言に、二人して笑った。が、紗枝の目は一つも笑っておらず、周子に付き合わされた、と言いたげだった。小さく謝ると、紗枝の視線が、周子の全身を観察する。

「寒ないんおす？」

と尋ねられ、周子は笑顔を浮かべ両手で紗枝の赤い頬を包んだ。紗枝は短い悲鳴を上げる。紗枝の頬も冷たかった。随分と待たせていたのだろう。それでも、夜風に晒された周子の両手は悴み、時に痛さを覚えるほどだった。紗枝は両頬から周子の手を剥がすと、微かに眉根に皺を寄せる。

「せやから、明日の始発で来たら言うたんどす」

「でも、明日は晴れて聞いたよ？」

「そうどす」

「せやったら、意味ないんよ」

駅の中は二人にとって不自然なほど広く、高く、長い。普段ならば、右手に伸びているエスカレーターは今頃も酔っ払った者を運んでいるところだ。正面に広がる近鉄の駅も閑散としている。左手のロータリーを見下ろすと、いつもならばタクシーがひしめき合っているのだが、今夜は不思議と数台しか見えない。

これらの現象は、京都の街を朝から覆っている薄暗い雪雲が原因だった。

どんよりとした空模様だったが、京の街はどこも真白で、外灯の柔らかな光を受け微かに光を振り撒いているようだった。

階段を降り大通りに出ると、髪やコートに雪が舞う。微かに積もっていた雪は既に誰かに踏まれ、小さな靴跡が見える。周子は露骨に落胆の色を示し、大きく溜息をついた。

「皆、早いわ」

「早い？」

ピンと来ない紗枝に、周子は力説する。

「紗枝はん、良い？ 京都で雪が降るのはレアなの。しかも、積もるなんて！ この機会を逃したら、もう次は何年後になるか分からないんだよ！」

「さいぜん聞きました」

紗枝は周子の言葉を耳に入れないように、両耳を塞ぐ。

周子が京都に来たのは、この雪のためだった。厳密に言うと、雪を踏みたくなくなった。誰も踏み込んだことのない白銀の世界に、塩見周子はこの足で、第一歩目を踏み込みたかった。そしてあの、聞き慣れない足音を聞いたかったのである。それも、地元の京都で。

だから、仕事をすぐに片付け、翌日の現場が京都であることを利用して、新幹線に飛び乗った。プロデューサーの小言は、雪に呼ばれているので押し通した。幸い、明日の仕事は午後から地元のテレビ局のゲスト出演である。手堅く話してもいいし、適当に話してもいい。こういう時、適当にやっていて良かったと思う。隣に立つ紗枝がどう思っているのかは聞かないが。

周子は屋根下で頭に積もった雪を払う。そうして飛び切りの笑顔を浮かべ、紗枝に告げる。

「さあ、紗枝はん、旅に出よう。未踏の地へ行こうじゃない」

「元氣どすなあ」

「この時のために頑張ったからね」

「使い方間違っておへんか？」

「そう？」

「そんどす」

「でも、紗枝はんも楽しみでしょ？」

「周子さんが楽しみ過ぎなだけじゃないですか？」

「え、嘘、だって、雪だよ？ 雪」

「聞きましたて……」

周子の後ろを紗枝がゆっくりとついてくる。京都駅から西へ、西へ、と歩く。東へ歩いて
も、辿り着くのは鴨川だけだった。こんな時分に、あそこへ寄るのは何が起こるか分かった

ものではない。北へ行けば飲食店が連なり、繁華街となっており、人はまだまだいるだろう。となれば、未踏の地ではない。京都駅より南は行ったことがなく、そこも鴨川同様に近寄りてはならないと耳にしたことがある。ゆえに、周子と紗枝に残された道は一つしかなかった。雪が積もっておらず、濡れた通りだけがずっと向こうまで伸びている。

「紗枝はんは、こっち側来たことある？」

「何かあるんどす？」

「何かあると思うよ。よう知らんけど」

「適当どすなあ」

二人して笑った。

雪は随分と勢いが弱くなり、風に吹かれ、ふわりと舞う。コートに張り付いたかと思えば、溶けて、染みに変わる。もうすぐ、やむのだろうか。けれども、空はまだ暗い雲で一杯だった。流れも遅く、月も星も見えない。慣れない道を歩く二人を、等間隔に並ぶ外灯だけが照らしている。外灯の笠には、ほんのりと雪が積もっている。

東寺はその門を固く閉ざしていた。きっと今この中に入れれば、周子の望む未踏の地が広がっていることだろう。沢山足跡をつけて、固まる雪の感触を足底で覚え、聞き慣れない不格好な音に聞き耳を立て、寒さで身体を震わせたことだろう。

「参拝客なんやけど？」

「ちゃうんとちやいます？」

「え、嘘？」

「参拝客いうんでしたら、明日来たらえんとちやいます？」

「明日、仕事だよ？」

「は？」

「え？」

東寺を通り過ぎ、また大通りに出た。正面には神社が見える。小さな神社だった。人影はみえない。一面真白な世界が広がっている。梢の先端まで震え、真っ白だった。足跡は、ない。

周子はその神社で、撮影したことがあった。まだ、実家との関係修復が上手くいってなかった時。まだ、アイドルになったばかりの頃。プロデューサーに、京都らしいけれど京都らしくない所。そう提案されて、この神社の存在を知った。

「どっちがいい？」

「周子はんのお好きな方で」

紗枝は何も訊かずに笑う。きっと、紗枝も知っているだろう。ある夏の日、二人は羽衣小町の新曲披露のために京都へ足を運んだ。その空き時間、ここでライブの成功を祈願したのである。

通りを渡り、鳥居を超える。漏れた白い息の音すら大きく聞こえる。境内を、ゆっくり、楽しむように歩く。地は周子の喜びに応じるように、聞き慣れない、重たい、ザク、という音を返してくれる。周子は顔一杯に笑みを浮かべた。紗枝も足底の不思議な感触を楽しんでいるようで、その顔には楽しげな笑みを浮かべている。

雪を満喫した頃、二人の全身は冷え切っていた。頭に手を伸ばすと、冷たい。靴先は色が

変わり、足の指まで雪が染み込んでいた。

それから二人は寒さで震える身体を引きずり、銭湯の暖簾を見付けると、顔を見合わせ、何も言わずに飛び込んだ。

二 夕涼み

その日も鴨川を通ってくる風は、四条のアスファルトで蒸され、強い熱気を孕んでいた。強い熱気の奥には、祇園の出囃子の音色や蝉の鳴き声も含まれている。

周子は紗枝の家の戸をくぐる。風鈴の涼し気な音が、周子の頭上で鳴る。通された部屋の衣紋掛けには、周子がこれから合わせる濃紺の着物が掛けてあった。京都のとある呉服店から、若者にも着物を親しんでもらいたいという要望があり、今年の新作着物のモデルに選ばれた。呉服屋の主人曰く、竹と麻をミックスさせた、とのことだった。周子にはよく分からなかったが、紗枝から、軽く、透け感が目立つということを教えてもらった。

モデルということだから着物を着て、撮影するだけだと思っていたのだが、いつの間にか、祇園祭の宵山生中継先でも着ることになっていた。プロデューサーに問い質すと、どうやら主人の熱意に負けたらしい。まあ、仕事があつて良かったじゃないか、とまとめられた。紗枝は何ともない様子で、プロデューサーと同じように、ええどすなあ、と言っていた。けれども、周子は紗枝の頬に微かな震えが差し込んだのを見逃さなかった。

周子は反対しようとしたが、この時分の仕事は毎年着物を着ている。いつまで経っても慣れない着物を。周子は紗枝のように着物を着る習慣はない。重たい、動きにくい、着崩れが起きやすい、苦しい、と堪ったものではない。

からん、と小さな音がしたかと思えば、紗枝が姿を見せた。麦茶を二つ携えて。微笑む紗枝はやはり、着物だった。前に見た時よりも薄く、一日また一日と近づく酷暑を押し退けるように藍白。

「随分、早かったおすなあ」

「どれくらい時間がかかるか分からんしね」

「前に着はったのに？」

「どんだけ前やと思ってるの……」

「そうどす？」

「そうなの」

「でも、覚えてはるやろ？」

「無理無理。もう曖昧。なんとなく覚えてるぐらい」

「珍しい」

戯ける紗枝に、周子は苦笑を返す。

「嫌味？」

「本音どす。周子はんやったら着付けぐらい簡単に……」

紗枝の口から漏れ出た言葉に、部屋の空気が一瞬、空気が重くなるうとした。二人はそれを二人共に悟られないように、冷たい麦茶を飲んだ。喉に詰まっている言葉を全て飲み込むように。

「紗枝はんは、それで行くの？」

「うちはまた別ので行きます」

「……間に合う？」

「周子はんの着付けが上手にできたら、間に合います」

「今日の紗枝はん、苦手」

「祇園で阿呆なことほできひん」

紗枝の小さな顔に、はっきりとした緊張が見える。周子は落ち着かせるように微笑む。

「そんな緊張せんでええよ。いつも通りでええんよ」

周子がこの時期に紗枝の宅で着付けをするようになったのは、今に始まったことではない。最初の頃は純粹に、着付けのために訪れていた。紗枝に着付けをされると、身が引き締める。身体の芯に一本の緊張感が走っているような。そんな感覚を覚えた。その緊張が紗枝から分け与えられた緊張ということに気付いたのは、その年の祇園祭の生中継の時だった。

紗枝の家から祇園は目と鼻の先にある。平安神宮の時とは全然違う。縁側で耳を澄ませば、

祇園祭の出囃子が微かながら聞こえてきそうだった。周子にとってしてみれば、だった、だろう。しかし、紗枝にとってしてみれば、毎年聞く音色。そんな場にアイドルとして立つ。周子は普段と変わらないように振る舞った。紗枝は過度に緊張しており、何とかその役目を担った、というものだった。

それから毎年、周子は紗枝から緊張を取り除くため、ここに足を運んだ。紗枝は毎年この時期になると、新しい緊張に苛まれていた。

ある年、紗枝は周子の帯を結ぶ手を止め、心持ち沈んだ調子で言った。紗枝の顔は鏡の向こうでも帯の影に隠れよく見えなかった。

『着付けやったら、うちやなくても』

『紗枝はんにしてもらうと、ちゃんとしな、って思うんよ』

嘘偽りのない言葉で伝える。同時に呪いのような言葉でもあるような気がした。すなわち、紗枝が緊張しなくなったら、周子の身体の芯から緊張感が抜け落ちてしまうのではないかと。失言を誤魔化そうとしたが上手く言葉が出てこず、紗枝との間に流れた沈黙は随分と気

まずかった。帯を結ぶ紗枝の手が動き出した。優しく、気遣うように。帯を結び終えた紗枝の頬は豊かな笑みが伸びていた。

『おおきに』

それがどういふ意味のお礼の言葉なのか周子は聞かなかった。その年の紗枝の顔に緊張の色はなかった。周子の身体の芯に流れていた緊張は、以降、年上としての微かな矜持な姿を変えたり、周子の肩の力を抜けさせたり、負けん気になつたりと様々な効果をもたらした。彼女と同じ舞台に立つのが、一層楽しくなつた。

「そろそろやらんと間に合はんかも」

周子は麦茶を飲み干すと、そう声を上げた。紗枝は飲みかけの麦茶を盆に置いた。汗のかいたコップが静かに輝く。

そうして、周子は姿見鏡の前に立つ。紗枝を気遣うように問う。

「今年は大丈夫なん？」

「今年は不思議と平気なんです」

「本当？」

「ほんまどす」

鏡の向こうで目を丸める周子に、紗枝は恥ずかしそうに笑う。

「周子はんが居てくれると安心するんどす」

周子の頬は、にわかになくなった。それから何か話そうとしたが、そういう言葉が返ってくると思っていなかったためか言葉はすぐに出てこなかった。鏡に見える紗枝の耳も赤くなり、無言で周子の着付けを行う。

不自然な沈黙の中でも、紗枝は手際は良い。一つ、また一つ周子は濃紺をまとわされ、白い顔は浮いてくる。明るい髪色が、濃紺との調和を崩すと思っていたが、思いの外崩すことなく、不思議と釣り合っている。

「帯、どないします？」

「普通のでいいよ。ここも崩しちゃうと変でしょ」

「麻のお太鼓でよろしいおす？」

「ええよー」

そんな短いやり取りをして、周子の準備が整い、紗枝の準備も整った。まだ、日は高く、四条の方へ出ても、屋台の一つも出ていないだろう。

団扇を仰ぎながら、風鈴の奏でる音に耳を傾ける。そうして、日が暮れるまで待つのも良いのかもしれない。けれども、準備を終えてしまうと勿体ないような気がする。紗枝は鏡の前に座り、髪を結つてるところだった。黒々とした髪が、鏡の中で川のように流れる。青紫の着物の上で、紗枝の黒髪は艶かしく光る。いとけない瞳は周子の見ていない間に、三つ四つ齡を重ねたように大人びた色を帯びていた。周子はそんな紗枝を歳相応に戻そうと、こゝろ声をかけた。

「ちょっと、錦行かへん？」

「折角のべべが汚れるんちゃいます？」

「おかんか」

「冗談どす」

「きつとこの時期、美味しい物があると思うんよ。錦とまでは言わんけど、クリームソーダとかもええなあ。ジェラートもええと思わん？」

「せやったら、行きましょ」

髪を結び終えた紗枝は周子に向き直り、そう言った。

京都の街に夜の帳が下りる頃、祇園は幾つもの提灯が並べられ、熱気に満ちていた。家族連れや観光客が足を止め、普段ならば車で煩い大通りも、今ではもう歩行者や屋台しか見えない。

二人は手慣れたように生中継を行い、祇園の喧騒から逃げるように花見小路を通り、そのまま東大路へ出た。皆、祇園に急ぐよう地下駄の音は北へ北へと流れていく。二人は冷やしきゅうりを片手に、祇園の熱気を受けて熱くなった身体を冷ますかのように、のんびりと歩いた。紗枝の指先が、微かに周子の指先に触れた。まだ熱が残っていた。けれども、言葉はしっかりと冷めており、それが勢いだけではないことを、周子に教えさせた。

「来年もよろしゅうおす」

周子は小さく、頷くだけだった。答えられなかったのは、きっと冷やしきゅうりを囓んでいたからであろう。

三 傘

雨宝院での仕事を終えた紗枝は、真っ直ぐ帰らず近くの傘屋に駆け込んだ。幸い晴れ間が続いているが、いつ崩れるか分からない。去年、春雨を受け、着物を点々と濡らし、江戸っ子に育てた覚えはない、と怒られた。プロデューサーから傘を借りることも考えたのだが、ビニール傘は嫌だ。

店頭に並べてある傘は無地が多かった。

「開けてみてもよろしおす」

と確認すると、白髪交じりの店主は嬉しそうに頷く。傘はどれも、紗枝の手には大きかった。加えて、色も無地ばかりで地味なものだった。確かに雨からは身を守ってくれそうだが

……。顎に指を当て考えていると、店主は一本の傘を紗枝に差し出した。持ち手の部分が小振りで細く、持ちやすくなっているが他はどこも変わらないように見える。

「これは……?」

「雨の日が楽しめるように施しました」

「お上手どすなあ」

紗枝はそう言って、一本の傘を買った。すぐに使うかもしれないので包装やタグは外してもらった。どこまでも簡素な月白色の傘。花模様や水玉等柄があるのを選ぶうとしていたのだが、どうしてこんな傘を買ってしまったのだろう。店主は、雨が降ったら分かる、としか言ってくれなかった。随分と商いが得意ではないのだろうか。

しかし店主に念を押されると、心のどこかで雨が降るのを心待ちにしている自分を見出していた。

まだ麗らかな陽の光が、街全体を包み込んでいた。御所を通り過ぎても空模様は変わらない。

見知った顔と再会した。その手には、店の名前が書かれた包みがあった。

「休みの日にお手伝いとは、周子はんも良い子に育ったんどすなあ」

「いや、いい加減炬燵から出ろって言われてね。しまえばいいじゃんって言ったたら、もうそりゃ大変よ。すらっと抜けて出たわけ」

「うちの褒め言葉返して」

「駄目」

「どこまで行かはるん？」

「ちょっとそこまで。紗枝はん、仕事は？」

「もう終わりました」

「早くない？」

「そりゃ、誰かさんと違ってふざけませんので」

「これね、スタッフさん達に予定してたの」

「は？」

「嘘」

「周子はん？」

「実家の炬燵でぬくぬくする予定やったんよ」

「はあ……」

「でもそれはできなくなったの、分かる？」

「周子はん」

「ん？」

「何か似たようなこと前……」

「炬燵は争いの元だからね、仕方ないよ」

「それで、また東京どすか？」

「んー、まだこっちなあ。明日の仕事が終わったら、行くよ」

そんなことを話していると、紗枝の髪が濡れた。紗枝と周子の声が重なった。紗枝は待ちに待ったかのように、傘を開ける。

「周子はん、包みが濡れるのはかなんのとちやいます?」

「いやあ、助かるよ」

「どこまで?」

「紗枝はんの所まで」

「なんでうちに?」

「なんと! 今月の新作なんです!」

「お茶もないとあきまへんなあ」

と、紗枝は笑顔で曲がる。雨は静かに、傘を濡らし続けた。しかし、傘に変わりはない。

店主の言葉は嘘だったのだろうか。と疑っていると、月白色の傘に模様が浮かんできた。周子は足を止め、傘を見上げる。紗枝も足を止め、見上げる。

「随分と変わった傘で……」

「そうだなあ……」

「何の模様?」

「なんでっしょろ？」

内側から見上げてても、暗い影を落とすばかりで何も見えない。二人は期待を胸に少し早足になった。白足袋の先が冷たくなつたが、構わなかつた。

茶屋に着いた時、月白の傘には一房の藤が、垂れていた。